東京芸術劇場シアターオペラvol.9（全国共同制作プロジェクト）

モーツァルト／歌劇『フィガロの結婚』～庭師は見た!～ 新演出

（全４幕・字幕付 原語＆一部日本語上演）

指揮・総監督：井上道義

演出：野田秀樹

新しい、日本の《フィガロ》の誕生!

撮影：宮下裕行

モーツァルトと野田秀樹の見事な融合。

舞台を幕末の「黒船来航」時代に、長崎に赴任してくる伯爵夫妻とケルビーノ以外を日本人に置き換え、「フィガ郎」と「スザ女（オンナ）」の結婚をめぐる騒動を、「庭師アントニ男」の視点で物語る。

オペラの本拠地であるヨーロッパでは、演劇畑の演出家がオペラの演出に進出するのは、かなり以前から当然のこととなっており、すでに長い歴史と蓄積がある。オペラ演出に意欲を示す演出家はあとを絶たない。昨今のように、演出本位のオペラが多い時代ではなおさらだ。そうした演出家たちは、しかしながら、ヨーロッパ教養人の常として小さい頃からオペラを見る習慣が少なからずあり、オペラを芝居とは別の世界だとあまり思っていないようだ。ヨーロッパの都市のなかでいちばん大きな劇場が歌劇場、あるいはいちばん華麗な芝居小屋がオペラ座、そうした感覚が染みこんでいるからだろう。

日本の場合、なかなかそうはいかない。オペラを見ることが――芝居を見ること以上に――特殊な経験と一般には映っているからであり、また劇場文化そのものが文化全体の枠組みのなかで果たす役割が、ヨーロッパほどには大きくないからでもある。そんななかで、オペラにさほど親しんでいない、また、オペラ独特の手法にも慣れず共感もない演劇の演出家がオペラに進出して、惨憺たるものを作っている場合が少なくなかった。

今回の『フィガロの結婚』は、そうしたなかで、初めて音楽と芝居とがうまくマッチングした稀有の例と言えるだろう。もともと、物語展開の間合いも快活で小気味よく、登場人物たちの洒脱な騙しあいにあふれたダ・ポンテの台本は、野田秀樹の芝居にどこか通じるものがある。ヴェルディやワーグナー以降の作品のように、音楽ががんじがらめにドラマを縛っているわけでもないモーツァルトのオペラの場合、さまざまな工夫や巧妙な改変を作品に施すゆとりがあちこちにあり、音楽の隙間に芝居の合いの手を入れる可能性がふんだんに用意されている。

そうした隙間を、野田秀樹は存分に活かしている。野田ファンは、いつも通りの野田がモーツァルトをダシにして自分本来の舞台を展開していることを確認して安心するか、あるいはしてやったりと快哉を叫ぶだろうし、モーツァルトのオペラ・ファンは――よっぽどコチコチの原理主義者でもない限り――、こんなことがオペラに出来るんだと認識を新たにするだろう。ここではモーツァルトの音楽の縛りが、むしろ野田の芝居に活力を与えている。

その要に、庭師を狂言廻しにするというアイディアがあるわけだが、この庭師の冒頭の前口上が、イタリア語と日本語ちゃんぽんの、ことば遊びにも富んだ、いわば「野田語」の世界へとモーツァルトを自然に飛翔させている。のっけからもうこれは野田版モーツァルトだ。そして、新しい日本の《フィガロ》、日本のモーツァルトだ。

文：長木誠司（音楽評論家）

10月22日（木）18:30開演（追加公演）**・24日（土）14:00開演・25日（日）14:00開演 コンサートホール**

詳細はP10へ

指揮・総監督：井上道義　演出：野田秀樹

出演：ナターレ・デ・カロリス／テオドラ・ゲオルギュー／小林沙羅／大山大輔／マルテン・エンゲルチェズ／森山京子／妻屋秀和／牧川修一／三浦大喜／コロン・えりか／廣川三憲

新国立劇場合唱団（合唱）、読売日本交響楽団（管弦楽）　ほか

主催：東京芸術劇場（公益財団法人東京都歴史文化財団）

共同制作：公益財団法人金沢芸術創造財団／兵庫県立芸術文化センター／サンポートホール高松／ミューザ川崎シンフォニーホール／東京芸術劇場／山形テルサ／名取市文化会館／宮崎県立芸術劇場／熊本県立劇場

海外オーケストラシリーズ Ⅰ·Ⅱ·Ⅲ

世界の音楽界をリードする旬の逸材を聴く!

©Erik Weiss　©Shion Isaka　©Marco Borggreve　©James Cheadle　©Martin Sigmund　©Marie Staggat

ベルリン・ドイツ交響楽団 詳細はP10へ

10月30日（金）19:00開演
コンサートホール

指揮：トゥガン・ソヒエフ　ヴァイオリン：神尾真由子
管弦楽：ベルリン・ドイツ交響楽団

シューベルト／劇音楽『ロザムンデ』D.797 序曲
メンデルスゾーン／ヴァイオリン協奏曲
ベートーヴェン／交響曲第7番

富士電機スーパーコンサート 詳細はP11へ

ロイヤル・コンセルトヘボウ管弦楽団
11月12日（木）19:00開演
コンサートホール

指揮：グスターボ・ヒメノ　ピアノ：ユジャ・ワン
管弦楽：ロイヤル・コンセルトヘボウ管弦楽団

チャイコフスキー／ピアノ協奏曲第2番
交響曲第6番「悲愴」　特別協賛：富士電機株式会社

フランクフルト放送交響楽団 詳細はP12へ

11月19日（木）19:00開演
コンサートホール

指揮：アンドレス・オロスコ=エストラーダ
ピアノ：アリス=紗良・オット　管弦楽：フランクフルト放送交響楽団

グリンカ／歌劇『ルスランとリュドミラ』序曲
チャイコフスキー／ピアノ協奏曲第1番
ブラームス／交響曲第1番

主催：東京芸術劇場（公益財団法人東京都歴史文化財団）

東京芸術劇場開館25周年記念コンサート

ジョワ・ド・ヴィーヴル ―生きる喜び

Photo: Marco Borggreve

あなたは光を耳で聴いたことはあるだろうか？ 祈りの深さを体験したことはあるだろうか？

「ジョワ・ド・ヴィーヴル」は、パフォーミングアートに関心あるすべての人にとっての冒険である。

700年ものスケールで繰り広げられる祝祭性と同時代性

そもそも、劇場やコンサートホールとは、何のための場所なのだろうか？　演劇と舞踊と音楽を、本来区別する必要は果たしてあるのだろうか？　東京芸術劇場コンサートホールで11月1日に行われる、開館25周年記念「ジョワ・ド・ヴィーヴル－生きる喜び」は、そんな問い直しから発した、過去に全く前例のないコンサートである。

いまあるクラシック演奏会の普通の「型」から、これほど逸脱した冒険的な試みは滅多にない。中世から現代までに至る、約700年ものスケールで、さまざまな時代や地域を自在に行き来し、オルガンから合唱、吹奏楽からオーケストラまで、多種多様な響きが盛り込まれているのだから。

ここにはフォーマルな祝祭という要素もあるが、よい演劇というものが常にすぐれて同時代的であるのとおなじように、このコンサートも、いまの社会や時代状況を想起させる、メッセージ性の強いものとなっている。アーティスティック・ディレクターの鈴木優人は、古楽から現代にいたるまで広大なレパートリーを持つ指揮者・作曲家・鍵盤楽器奏者・プロデューサーであり、今後の未来の音楽界を担う総合的音楽家として注目されている。彼によれば、一見バラエティ豊かで壮大なこのコンサート、実はかなり周到に構成したものだという。

15時にはじまる第1部「祈り」では、パイプオルガンが活躍するのがポイント。そもそもオルガンという楽器は、孤立したジャンルなどでは決してない。かつてモーツァルトが「楽器の王」と述べたことに象徴されるように、古今のすべての音楽にとっての重要な根本であり、特殊で空間的な音響体験へと聴き手を誘う、魂を飛翔させてくれる至高の方法なのである。

劇場の内と外のダイナミズムへ

16時から17時半くらいまでにかけての休憩時間には面白い偶然がある。劇場のすぐ外の池袋西口公園では、カラフルな布をつないだ「大風呂敷」に彩られた「プロジェクトFUKUSHIMA!」のフェスティバルが行われているのだ。これは東日本大震災を機に、福島の現在と未来を世界に発信するために、音楽家・大友良英らが中心となり継続されているもの。祈りの世界が強く意味をなすのは、まさにこうした現在の福島の状況と照応したときであろう。劇場の内と外とのこうしたダイナミズムは音楽や演劇の本質にかかわる問題でもある。

そして第2部「希望と愛」。ここでメインとなるのはメシアンの「トゥーランガリーラ交響曲」。この作品はいわば“壮大な愛”についての音楽であり、輝かしい音がふんだんに盛り込まれている。そもそも光や色は目で見るものであるが、20世紀最大の作曲家メシアンは、音にも色があると考えた人である。みなさんは想像できるだろうか？　音で輝きを聴くことができる、いや――浴びることができる、ということを。これは超感覚体験の音楽なのである。

ちなみに、鈴木優人はこの「トゥーランガリーラ交響曲」の第5楽章「星たちの血の喜び」についてこう語っていた。「メシアンは戦争経験者でした。彼にとって、血を流して死んだ人たちは星になったのだと思います。その人たちは決して喜んで死んでいったわけではない。でも天国ではきらきらとまたたいているのです」

こうした幻想的なビジョンを聞くと、もはや音楽と演劇の違いなどどうでもよくなってくる。大切なのは私たちが生きて、感覚を働かせて、ライヴで、偉大で永遠なものについての体験を共にできることなのだ。

取材・文：林田直樹（音楽ジャーナリスト・評論家）

11月1日（日）　コンサートホール

詳細はP11へ

第1部「祈り」15:00開演

指揮＆ポジティフ・オルガン：鈴木優人　オルガン：石丸由佳　ダンス：小尻健太　合唱：バッハ・コレギウム・ジャパン

鈴木優人／《アポカリプシスⅡ》（抜粋）
N.deグリニー／讃歌《来たれ、創り主なる聖霊よ、（ヴェニ・クレアトール）》より〈テノール声部の定旋律による5声のプラン・ジュ〉
G.deマショー／モテトゥス《よき羊飼い》
G.S.リゲティ／《オルガンのための二つの習作》より「クレ」
A.ペルト／《主よ平和を与えたまえ》
J.S.バッハ／モテット《私はあなたを離しません》BWVAnh.159
J.アラン／《連祷》
W.A.モーツァルト／《アヴェ・ヴェルム・コルプス》KV618
J.P.スウェーリンク／《涙のパヴァーヌ》SwWV328
D.ラング／《愛は強いから》
J.S.バッハ／《我ら苦難の極みにあるときも》BWV641

第2部「希望と愛」17:30開演

指揮：鈴木優人　ピアノ：児玉 桃*　オンド・マルトノ：原田 節*　吹奏楽：芸劇ウインド・オーケストラ**　管弦楽：東京交響楽団*

小出稚子／ウィンドアンサンブルのための《玉虫ノスタリジア》バリトンサクソフォン版（世界初演）**
I. ストラヴィンスキー（R.アールズ編曲）／組曲《火の鳥》吹奏楽版全曲（1919年版）**
O. メシアン／《トゥーランガリーラ交響曲》*

©Goro Tamura　©N.Ikegami　©Marco Borggreve　©Yutaka Hamano

主催：東京芸術劇場（公益財団法人東京都歴史文化財団）

世界が注目する破格の才能を次々に送り出してきた、南米ベネズエラの「エル・システマ」。
東京芸術劇場が音楽の楽園となった2013年秋に続き、今年も彼らを招いてのフェスティバルが開催される。

コンサートで、テレビで、インターネットで、目撃した音楽ファンの間ではもはや伝説化しているオーケストラが、音楽シーンに嵐を呼ぶ指揮者・ドゥダメルとシモン・ボリバル交響楽団(元ユース・オーケストラ)。彼らを生み出し、世界中の音楽シーンに大きな衝撃を与えたのは、ベネズエラの社会を変えたとさえ称される教育機関「エル・システマ」だ。その実力、熱狂、精神などを東京の音楽ファンも肌で感じることができた2013年の『エル・システマ・フェスティバル』では、多くの聴衆が音楽のもつパワーに触れ、彼らの熱演や誇りに対して熱い拍手を送った。

その反響に応え、今年の11月にも同フェスティバルが開催される。来日するオーケストラは14歳から25歳の若手奏者たち、約200名で構成されている「テレサ・カレーニョ・ユース・オーケストラ・オブ・ベネズエラ」。国を代表する伝説的ピアニストの名前を冠したこのオーケストラは、ドゥダメルに続く才能と称されるバスケスに率いられ、音楽を創造する喜びや感動を私たちに伝えてくれるだろう。コンサートに加えて、「エル・システマ」の新しい挑戦と言える50歳以上を対象としたワークショップなども開催される。

熱狂のコンサートと斬新なワークショップ

バスケス指揮による2回のオーケストラ・コンサートは、音楽がもつ感動を信じるすべてのリスナーや、クラシック音楽を学ぶ若い世代の方たちに聴いていただきたい内容だ。ジャズ・ピアニストの小曽根真がラフマニノフを弾く11月17日のコンサートでは、オーケストラの腕試しと言える華麗なR.シュトラウス作品で実力を披露。ベルリオーズの「幻想交響曲」や南北アメリカの作品を演奏する11月21日のコンサートでは、ホールの体感温度が上がるほどの熱狂を体験していただけるだろう。

さらに注目すべきは、独特のノウハウを駆使した音楽ワークショップだ。50歳以上の楽器未経験者がオーケストラでの演奏にチャレンジする『50歳からの！12時間でシンフォニーに挑戦しよう！』、そして聴覚障害者が白い手袋の力を借りて合唱を楽しむ『ホワイトハンドコーラス』。2つのプロジェクトは「エル・システマ」の存在価値や精神そのものだと言える「音楽と社会との密接な関係」について、日本の社会にも一石を投じるものになる。その驚きと感動を、ぜひ体験してほしい。

文:オヤマダアツシ

“喜びの音”が世界を変える!

「君たちはこの楽器で世界を変えるんだ！」アブレウ博士が、とあるガレージで11人の子どもに語りかけてから40年。「エル・システマ」は猛烈な勢いで世界中の人々の魂に触れ、音楽とは何か改めて私たちに問いかけています。テレサ・カレーニョ・ユース・オーケストラの団員も皆、楽器を手にすることによって自分と周りの人々の世界を変えた生き証人です。彼らの、力強い決心と喜びの音をぜひ聴きにいらしてください！
次はあなたの世界が変わるかもしれません。

―― コロンえりか(駐日ベネズエラ大使夫人・ソプラノ歌手)

クリスティアン・バスケス
©Wolf Marloh

小曽根 真
©豊山紀信

詳細はP12へ

11月17日(火) 19:00開演
コンサートホール
指揮:クリスティアン・バスケス　ピアノ:小曽根 真
管弦楽:テレサ・カレーニョ・ユース・オーケストラ・オブ・ベネズエラ
R.シュトラウス／交響詩「ドン・ファン」op.20
ラフマニノフ／パガニーニの主題による狂詩曲 op.43
R.シュトラウス／交響詩「英雄の生涯」op.40

11月21日(土) 15:00開演
コンサートホール
指揮:クリスティアン・バスケス
管弦楽:テレサ・カレーニョ・ユース・オーケストラ・オブ・ベネズエラ
バーンスタイン／《キャンディード》序曲
ヒナステラ／バレエ《エスタンシア》op.8から 舞曲
カルロス・チャベス／シンフォニア・インディア
ベルリオーズ／幻想交響曲 op.14

主催:駐日ベネズエラ・ボリバル共和国大使館／東京芸術劇場(公益財団法人東京都歴史文化財団)／一般社団法人エル・システマジャパン／豊島区(11/21公演)

ワークショップ情報

エル・システマ・フェスティバル 2015 ワークショップ
『50歳からの!12時間でシンフォニーに挑戦しよう!』
【練習】11月16日(月)～18日(水) 15:00～19:00
【演奏会】11月18日(水) 19:00～20:30　※3日間連続のワークショップです。
テレサ・カレーニョ・ユース・オーケストラメンバーとの合同演奏を予定。
■参加条件:楽器未経験者で50歳以上、全日程参加可能な方　■参加費:無料　※事前申込制

『ホワイトハンドコーラス ワークショップ』
11月21日(土) 13:00～15:00(予定)
※15:00より、コンサートホール舞台上にて発表会を予定。
■参加対象:聴覚障害者をはじめ、一緒に歌いたい方
■参加費:無料　※事前申込制

ワークショップの詳細はHPをご覧ください。

ザ・フィルハーモニクス

10月26日(月) 19:00開演 コンサートホール　詳細はP10へ

©Maria Svarbova

大人気のスーパーアンサンブルが待望の再来日。

ウィーン・フィルの楽員が加わる室内楽アンサンブルは多数あるが、「ザ・フィルハーモニクス」ほど痛快で、目が釘付けになるほど高度な演奏を聴かせてくれるグループはないだろう。レパートリーはジャンル越境タイプで演奏は超一流。ヨーロッパでは完売続出の人気を誇る7人が、今年も東京芸術劇場のステージへ登場する。クラシック音楽ビギナーにもおすすめできる幸福なコンサートだ。

出演:ザ・フィルハーモニクス
シュトラウスⅡ(S.コンツ編)／喜歌劇「こうもり」より“チャールダーシュ”　ブラームス(T.コヴァーチ編)／ハンガリー舞曲 第6番
サン=サーンス(T.コヴァーチ編)／交響曲「死の舞踏」Op.40　リスト(F.ヤノーシュカ編)／愛の夢 第3番　ほか

主催:ジャパン・アーツ
提携:東京芸術劇場(公益財団法人東京都歴史文化財団)

前橋汀子 デイライト・コンサート Vol.3

10月28日(水) 11:30開演　コンサートホール　詳細はP10へ

前橋汀子
©豊山紀信

松本和将

ランチタイム前のひとときを極上の音楽で

人気ヴァイオリニストが名曲でおもてなしをしてくれるシリーズは、クラシック初心者にも大好評を得て3回目。ランチタイム前の1時間、華麗な演奏に誰もが心を満たされる至福のひとときだ。プログラムはおなじみの名曲をはじめ、幅広いジャンルの曲や珠玉の小品、ヴァイオリンの魅力を生かした編曲作品のメドレーなど、こだわりのラインナップ。特別な時間を超一流の音楽と共に。

ヴァイオリン:前橋汀子　ピアノ:松本和将
ドビュッシー／亜麻色の髪の乙女　ベートーヴェン／ロマンス 第2番 ヘ長調 op.50　クライスラー／ウィーン奇想曲
サン=サーンス／「動物の謝肉祭」より 白鳥　懐かしの青春メドレー／“テネシー・ワルツ”、ロシア民謡“黒い瞳”、“マイ・ウェイ”　ほか

主催:KAJIMOTO
提携:東京芸術劇場(公益財団法人東京都歴史文化財団)

東京芸術劇場&ミューザ川崎シンフォニーホール共同企画 第6回音楽大学オーケストラ・フェスティバル

11月8日(日)15:00開演 ・ 15日(日)15:00開演 コンサートホール　詳細はP11へ

梅田俊明
©三浦興一

秋山和慶

下野竜也
©aoya_Yamaguchi

山下一史
©K.Miura

未来の巨匠が集うオーケストラの祭典。

秋には首都圏の音楽大学が個々に、そして春には各大学の選抜混成チームで公演を行う『音楽大学オーケストラ・フェスティバル』。2015年11月には参加9大学のうち4大学が東京芸術劇場で演奏。1回のチケットが1,000円という価格であるため、同世代はもちろん、音大を目指す高校生も気軽に聴けるはずだ。

11月8日(日) 15:00開演
指揮:梅田俊明(武蔵野音楽大学)／秋山和慶(洗足学園音楽大学)
シベリウス／交響曲 第2番 ニ長調 作品43(武蔵野音楽大学)
ムソルグスキー(ラヴェル編曲)／組曲「展覧会の絵」(洗足学園音楽大学)

11月15日(日) 15:00開演
指揮:下野竜也(上野学園大学)／山下一史(東京藝術大学)
ブリテン／シンフォニア・ダ・レクイエム　作品20(上野学園大学)
R.シュトラウス／交響詩「ツァラトゥストラはかく語りき」Op.30, TrV176(東京藝術大学)　ほか

主催:音楽大学オーケストラ・フェスティバル実行委員会／東京芸術劇場(公益財団法人東京都歴史文化財団)／ミューザ川崎シンフォニーホール(川崎市文化財団グループ)

東京芸術劇場パイプオルガンコンサート Vol.20 ～聖夜に贈るクリスマス・オラトリオ～

12月16日(水) 19:00開演　コンサートホール　詳細はP13へ

©Hikaru.☆

「第九」の合間に聴きたい聖なる響き。

クリスマスを前にしてちょっと厳かな気分になれる『パイプオルガンコンサート』は、音楽を聴きながら1年を振り返りたくなる一夜。オルガンの響きに心を委ね、ハープや声楽との作品、そしてサン=サーンス作曲の美しい教会音楽(声楽曲)を聴いて、新しい年を迎える準備をしたい。

指揮&カウンターテナー:青木洋也　オルガン:小林英之／新山恵理／平井靖子／川越聡子　ハープ:片岡詩乃　合唱:清水 梢／大田茉里／小林 恵／大森彩加(Sop)
高橋幸恵／奥石まりあ／朝倉麻里亜／佐々木香菜子(Alt)　豊原奏／及川 豊／吉田 宏(Ten)　加耒 徹／杉山範雄／小池優介(Bar)　管弦楽:フィルハーモニーカンマーアンサンブル
ブクステフーデ／コラール「暁の星はいと美しきかな」BuxWV223　J.S.バッハ／前奏曲とフーガ ハ長調 BWV547
ギルマン／ヘンデルの「頭を上げよ」による宗教的行進曲 Op.15,2　サン=サーンス／クリスマス・オラトリオ Op.12　ほか

主催:東京芸術劇場(公益財団法人東京都歴史文化財団)／豊島区